

モンタナで考えたこと

——自然保護の未来——

湊 正 雄



モンタナ州の西部には、ロッキー山脈が縦断している。私も一家四人が半年すごしたミゾウラ市は、この山脈の中央部にあり、人口の少ないこの州としては、大きな町であるが典型的な大都市で、学生をふくめても三、四万人のものだろう。景色の良いことと、人情のこまやかなことは、行くまえからいろんな人々にきかされていたが、事実はそのとおりであった。

昭和四十二年の末、ミゾウラのモンタナ大学の地質学教室で、構造地質学の教授に欠員を生じたので、一年間、講義をやってもらえないかという、思いがけない手紙をその教室主任からうけとった。

私自身は、ロッキー山脈の地質をみたい

と思っていたので有難い機会だと思ったのであるが、教室の事情もあり、半年間だけならば出張講義もよろしいということになり、翌年の九月から昭和四十三年の三月末まで、ミゾウラに滞在することになった。

ところで私は、英語を話す国にいたことはない。中国やインドネシア・イラン・パキスタン・インドといった方面で働いたり地質の見学旅行を行ったことはあるし、東欧をふくめて、欧州には何度か出かけたこともある。しかし、それは会議の折りや、短い講義のためであった。

そこで出発が近づくとき、言葉についての不安が重く私の心にのしかかってきた。

ミゾウラのモンタナ大学では『アジアの

地質構造』という題目で、一週に二回、四時間ずつ、きちんとやらなければならぬ。日本流の休講などは、外国ではないから、それは相当の量となるだろう。日本にいて外国でやる講義の準備をするほどひまはないから、万事は行ってからしななければならぬ。原稿は、当然に毎回つくらねばならないことになる。私どものような我流の英文を読んだところで、きく人がわかるはずのものではない。しかし、原稿はいちおうつくる必要がある。そうだとすると、私のまずい文字をタイプできる人が必要になる。それは、まず家内以外にはいないことが明らかである。家内がゆくためには、子供をつれてゆかねばならない。

こうして、すでに資料は船で送付し、ひとりで赴任するといっておいたものに、わかに予定を変更して一家四人で、でかけたのである。

□

昭和四十三年の九月早々、ブラハの国際会議から帰国して、出発まではわずか十日よりなかったが、休む間もなく家族のピザなどに奔走し、あわただしく出かけていった。長女のみは京都で学生生活をしていたので、日本に残っていたのである。

九月十五日に着任し、家も教室の同僚の好意で探してもらい、車も買った。わかってもわからなくても、子供は中学と高校にゆきはじめた。私の講義もはじまり、あと

は淡々とした日にあけられていった。大学院生が相手であるはずであるが、客員教授の講義には、欧州でも、アメリカでも、教官がみな出席するから、らかな仕事ではない。実際は家内のほうは、もっと大変であったろう。それでも同僚の夫人たちが、いろいろと親切にしてくれたので、だんだんに事情がわかっていった。

私もせっかくなのだから、講義の準備以外は、地質の見学に時間をさくことにした。私の希望も、みんなが理解してくれたので、毎週必ず誰かが一回は数百キロの距離を案内してくださった。

こうして、私もなりにロッキー山脈の周辺の事情を理解しはじめたのである。

西部開拓史 (How the West was won)

という映画を、日本にいて、みたことがある。これは映画史のうえで、最高の超大作といわれているもの由である。つづけて何度も見にいったほどで、その印象はいまも鮮明である。もちろん、これは芸術であって、歴史そのものではない。あの映画の舞台はモンタナ州でもない。もっと南の話である。しかし、今日のモンタナ州の姿は要するにあの映画に示されたような開拓史の結果として存在するものだろう、と思うようになってきた。

東部から移民が、この地にやってきたの

は、北海道と同じく百年ぐらい前のことにすぎないらしい。違うのは、北海道では、その前に鯨や鮭の封建時代の漁場の歴史があるのに対して、ここではフランス系移民者の砂金採取の歴史が、開拓史以前につけ加わることである。大学も北海道のばあいは、農学校ではじまっている。しかし、モンタナ州では豊富な金属資源の開発のために、まず地質学教室が設けられた点にある。初代の学長も地質学者で、最初の学位取得者も地質学者であったということである。

ロッキー山脈は、いくつもの支脈にわかれ、その間には大小の谷や平原がひろがっている。頂上近くには、大概のところでも水をのせている。

ミゾウラの平原は海拔千メートルであるが、氷河は二千メートル近くまで降りてきている。氷河の周辺は、もちろん露崖となっており、先カンブリア界の堆積岩が美しい編目をあらわしている。遠望でも近づいてみても、私にはその美しさを形容する言葉が思いつかない。露崖の下は草つきで、山麓には針葉樹林がひろがっている。そのあたりは、大体において氷堆石のつくる丘陵地なのである。

牧場はこうした丘陵地から平原にかけてそこかしこにひろがっている。

ところで、こうした景色ならば、スイスをはじめとして、他にいくらでも例を求められるのであろう。しかし私が感動するのは、自然のスケールの大ききなのである。

幾重にも長くつづく山なみ。その間にひろがる大平原。それが、みなければいいに大きいことなのである。もう一つの特徴は、手いれのゆきとどいた山の牧場や教会の尖塔を中心に、きれいにまとまった集落、伝統のある古い美しい町といったスイスアルプスでよくみかける点景を欠く、荒々しさにあるのである。いわば、自然が生のまま残っている点にあるのである。

しかし、日が経つにつれて、これでは理解が浅いことを悟るにいたった。じつは私どものような、旅行者のほとんどすべての人が自然のままとみて通るところが、ひどく人間くさいものなのである。人々の苦闘の跡が、いたるところにきざみこまれていくものなのである。

ロロ山、ピッタールート山、ミッシュン山などのふもとには、いたるところに掘りかえされた。溝が残っている。それは話にきくゆうれい町の跡で、砂金掘の名残りのものである。露崖に向って迎ってゆく峡谷には、思わぬところに造材の玉道が残されている。遠くからはみえないだけで、山腹からふもとの丘陵地には、伐って伐って伐り

まくった造材事業のたくましがいたるところに刻印されている。私どもが原始林と想って眺めていた針葉樹林も、じつは伐りあとに自然に復活した若木の生長したものである。

森のなかで造材の事務所のあとらしい、くずれおちた丸太小屋、無細工なガラスの酒びんといったものを前にして、私どもは案内の教授たちとしばし、感慨にふけったことがある。

山麓から平原にかけての大牧場でも、それがいきなり、そうなったと思うのは、まちがっている。牧場内に点々と残っている森林は、じつは日本流にいうと、離農していった人々の牧草畑に、ふたたび木が生えたあとなのである。土台だけが残っている小さな教会、移民がつけた砂利道が、やぶのなかにかすかにみえがくれている。そのことが、北海道の十勝や天北でみてきた離農者の苦しみと同じような悲しみを秘めているわけのものであった。

こういう意味では、ロッキー山脈の周辺に、いまや自然はまったく残っていないのである。平原が開けてゆくにしたがって鹿や熊や狐といったものも、次第に山地に追いこまれる運命をたどった。

高校に行っている長男は、十七才にもなつて銃をいじったことがないといって、同

級生から笑われたということである。早速射撃場に連れてゆかれて、どきもを抜かれたらしい。地質教室の一〇人の教授は、たいがい家に五、六丁の銃をもっている。な

かには南北戦争や独立戦争のときに、曾父や先祖が使ったものだというのを大事に飾っているひともいた。しかし大部分の人にとっては地質調査の折りに、ジープのなかに銃をいれていって、獲物をみれば、撃つてみるためのものであった。ピュッテの鉱山大学のフィスク教授の家では、自分が撃った熊と鹿の皮が幾枚もあったし、フィルド教授のところでは、子供が十五才のときにとったという鹿の皮が居間にかけられてあった。

鹿は、昔はミゾウラ市郊外を大群をなして移動していた由で、山地でなければみられなくなったのは、この二、三十年来のことであるとの話であった。

北太平洋鉄道が、この地方を通過してシャトルまでつけられる頃、野牛はすでに絶滅するほどに狩りつくされたものらしい。野牛については、西部開拓史の映画にみるような風景が、ここでも例外でなかったことが想像される次第である。いま、野牛公園と呼ばれるミゾウラ郊外の丘陵地で、無心に草をはむ野牛の小さな群に、その昔がしのばれるわけである。その近くで、インデ

アンの教育をしているヨード夫人が停年後に住むために買いつつてある家を、私もは借りていたわけであった。時折り、その集落を訪れたものである。

私のすんでいた家の隣は、ウクライナからきたドイツ系の移民の子孫で、レヒナー夫妻といっていた。ともに七〇才を越えているが、元気であった。私どもは札幌に残してきた年老いた父母を思いだして、親切にしていたが、この人々も、よく茶飲み話にしたがねてきた。ドイツ語は完全に忘れていて、わかりにくい英語で、若い頃にみたミゾラウ河の鮭漁のことなどを話してくれた。大変なものであった由である。

ミゾウラに滞在中は、みんなが私どもを家庭によんで下さったし、大学院生も教授たちも大勢つれだつて始終きてくれた。ピュッテや、ワシントン州のブルマン大学には熟知の教授もいて、訪ねあった。アメリカ地質学会の年次大会は十一月にメキシコで行なわれたが、私も出張させてもらったので、アメリカに來ていることは旧知の各大学の方々に知れわたってしまった。こういう次第で、かつて日本や欧州で協同研究していた方々から招待をうけることになった。

三月十五日にミゾウラを発ち、カンサスからテキサスに南下し、ついでフロリダか

ら北上して、ポストンまで東部の有名な研究所はひとわりみるとともに、アメリカとしては古い都市や郊外を、能率的に見学したわけであろう。帰途にサンフランシスコやロスアンゼルスにも立ちよつたので、かけあしであるがアメリカの自然と、ひとをみて帰つたわけである。

私の感想としては、自然についても自然の破壊の程度についても、欧州とアメリカを比較するのも、日本のそれにくらべてもつまるところ、五十歩百歩であると思われる。

自然の失われてゆくのは、前にも本誌に書いたが必然であると思われる。泣いてもわめいても、その方向にあるのはやむを得ないことである。

ただし、美しい住みよい環境として、この世を未来に残す道がないわけではない。自然保護というが、その心根のどこかに、美人を集めておいて、もうけ仕事になるような心が働いている限り、その目的は達成されないであろう。

すべての婦人が健康で美しいような社会では、美人を売りものにする事業は成立しないであろう。観光事業なるものも、多くの人々が真に美しい風景の復活や自然の保護を志すときに、形の変つたものになる

であろう。気持ちの良い宿泊設備の必要性は増すであろうし、その反面、そうした設備が風景を乱すことになるのを誰も望まないからである。

工場がたちならんでも、過密都市でも、それなりに、いまよりはるかに良い生活環境をとりもどす方法がないわけではないと私は考える。勤勉に働く者が一年に半月や一カ月、家族とともに美しい自然のなかで静かに安い費用で過ごし得るところも、方法もあるはずだと考えている。ただし、それにはそれなりの順序が必要であり、やはり政治の問題であろう。一歩ずつ、それに近づく道を探すべきだと私は考える。

自然保護というも、つまるところ国民の真の幸福につらなっているから大切なのであり、どこそこの森や鳥の保護は、第一歩であつても、それで足りるというものではないのは、明白なはずである。

南北、二千キロ以上にわたる日本列島のいたるところに、スイスやモンタナなどの自然環境の復活が可能でない、などと考えるのは馬鹿げた話であろう。

(北大理学部教授)